
生えてきたのは神様（候補）でした 3

国高ユウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生えてきたのは神様（候補）でした③

【Zコード】

Z2048P

【作者名】

国高コウチ

【あらすじ】

生ってきたのは神様（候補）でしたの続きです。

今、麻耶の前で胸を逸らせてふんぞり返っている彼は、頭にエレモ
フィラ・ラケモサそつくりな花を咲かせる少年だ。

赤く靡くマントに、昔のドイツの軍服のような黒い上下を纏う彼は、
生え際から黄色、橙、赤と変化する不思議な色の髪を一本で結い高
笑いしていた。

ヒナと比べるときりりと精悍な顔をした男の子だが、とても不思議
な感性を持つている。

「俺様の名はー、エルフリード・ガレル・ド・イリージヤ三世だぜ
！」

「・・・もう一度お願ひできる？」

「だから、俺様の名はー、エルフリード・ガルロ・デ・イルージャ
三世だぜー！」

ふはーはっはっと胸を張る子供に、麻耶は眉を下げて笑う。

先ほどと名前違うよ、とか三世って前に誰が居たのか色々と突つ
込みどころが多すぎる発言をした彼は、未だに名前が定まつていな
い子供だ。

何故名前が定まらないかと言えば、彼だけ自發的に自分の名前を報
告してくるくせに、毎度毎度微妙に名前が違うのだ。

絶対に自分も把握していないだろうに、胸を張る姿が可愛くてつい
突つ込めない。

一人だけ頭に咲く花が三つの彼は、とても元気よく明るいくて、さ
らに不思議な感性をしていた。

ちなみに体に纏うマントも軍服のような上下も彼のリクエストにより作られたものだが、似合っているだけに色々と微妙だ。

「 鬱陶しい。そして暑苦しいです」

反対側の掌にすくと立つ白薔薇を頭に咲かせた男の子が、綺麗な顔を歪めて睨む。

僅かにピンクがかつた白い髪を腰ほどまで伸ばし、切れ長の瞳を剣呑に細めていた。

生えてきた男の子達の中でも特に秀でた美しい容姿の彼の名前はペース。

頭に咲き誇る薔薇の見た目と、平和を掛けたものだが、これが中々好戦的な性格をしていた。

彼は麻耶にだけは素直なだが、他の面々に対しても些か辛辣な面を持つ。

常に一步下がった態度で周囲を見て、状況に応じて臨機応変に行動するのがペースの特徴だ。

冷静で落ち着いたペースと、明るくわが道を行く隣の彼は、相性がとても宜しくない。

「 うるせえな！俺様の何処が暑苦しいんだ！」

「 全てです。敢えて言つならその存在が。見た目からして暑苦しいです」

「 んだとー」

「 ほーら、止めなさい。喧嘩するなら下に降ろしちゃうよ」

「 つ、駄目です！折角マヤの掌を独占してるのにー！」

「俺様は降りないぜ。マヤと遊ぶんだからなー。」

「マヤと遊ぶのは私です！大体あなた名前すら定まってないじゃないですか。どこか遠くで決めてらっしゃいな」

「俺様の名前は決まってるつーのー。ハルフリード・ガルメ・ダ・イルード三世だぜ！」

「ほらみなさい、また違う。・・・マヤ、こんなお馬鹿さん捨てて、私と一緒に唱歌いましょ」

「駄目だ！マヤは今から俺様と一緒に唱歌うんだぜ！」

掌の上で顔をつき合わせて睨み合つ一人に、麻耶はそっとため息を吐く。

二人とも他の子供達に比べれば精神年齢が高いのだが、やはりまだまだ子供といつていいのか。

ため息を吐いた麻耶に気付いた一人は、びっくりと体を震わせてこちらを見上げた。

先ほどまでとはまつて変わり、心配そうに見上げる眼差しは不安で一杯だ。

喧嘩するなら降ろしてしまつと言つたのを覚えているらしく、一応罪悪感を抱いているらしい。

情けなく眉を下げた一人に微笑みかけると、自分の近くまで引き寄せれる。

まず見詰めたのは名前が確定していない方の子供。

やはりこのままでは呼ぶ時に困るし、彼の名づけの法則もなんとなく気付いた。

「よし、決めた」

「決めたって、何をだ？」

「君の名前。君の名前はエルフリード。三世は誰の三世か判らないから、短くしてエルフリード。これだと私も呼びやすいし、君も間違つたりしないでしよう?」

「俺様の名前……エルフリード」

「そう!…どうかな、ピース」

「マヤがつけてくれた私の名前の方がいいです」

「何だと!? エルフリードだって、マヤがつけてくれた!」

「違います。あなたの名乗りを取つただけです。私の『ピース』の方が格段に宜しい」

「つ……、マヤ! 俺様の名前もちゃんとつけて欲しいぞ! エルフリードなんて嫌なんだぜ! !」

掌で地団太踏んで悔しがる子供に、麻耶は苦笑した。
エルフリードに拘つたのは麻耶ではなく彼のはずだったのに、自慢された途端に嫌になつてしまつたらしい。
仕方ないと掌を自分の視線まで持ち上げ、瞳を細める。

「長い名前がいいの?」

「そ、うなんだぜ! 俺様に似合つ、ばっちらり格好いいのがいいんだぜよ!」

「……そ、うだなあ。それなら、『アール・コン・スイエル』はどう? 虹つて意味。君の頭に咲く花の前によくつけられる敬称なんだよ」

「『アール・コン・スイエル』……凄い、格好いいぞ! 俺様の名前はアール・コン……ええっと」

「普段はアールって呼ばうか」

「判つた！俺様の名前は『アール』…どうだ、ピースのクソ馬鹿野郎！俺様の名前の方が格好いいぞ！」

「つ、私の名前の方が綺麗です！大体私の方が先につけてもらつたんですからね！」

「後先なんて関係ないし、俺様の名前の方が長い分だけ愛が籠つてるぜ！」

「…、そんなことないですよね、マヤ！？私の名前の方が愛が籠つてますよね！？」

言い負かされて必死の眼差しを向けるピースに、可愛いなと和んでしまう。

本人は必死だらうけれど、自分の前でだけ素直な態度を取るピースはとても愛しい。

握りつぶさないよう柔らかな力で体を包むと、親指に縋るように抱きついてきた。

全力で抱きついているのか、その締め付けは僅かに痛みを感じるが表情を出さないように気をつける。

「眥を平等に愛してる。だから心配しないで、ピース。君の名前も特別で、アールの名前も特別。大事で特別で愛しいものだよ」

ふわりと微笑めば、瞳を丸くして次の瞬間には嬉しげに破顔した。縋り付いていた力が和らぎ、すりすりと頬を摺り寄せる。

それを見て頬を膨らませたアールも、一生懸命親指を起こすと抱きついた。

ぱちり、と絡んだ視線の先で火花が散る。

心地よい青空の下、今日もとても平和な争いが始まろうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2048p/>

生えてきたのは神様（候補）でした3

2011年8月21日14時58分発行